

◆民族のこころ(147)◆

インドの都市の一風景

井坂 理穂*



学生時代にインドに長期滞在したときには、大学寮や友人宅で生活していたのだが、一昨年、初めてインドで一軒家を借りて生活することになった。その家はもともとは知り合いのご夫婦が住んでいたのだが、当時ちょうど空き家になっていたのだ。場所は、インド西部に位置するグジャラート州の大都市アフマダーバードの郊外。ミドル・クラス上層の人々が住む新興住宅地の一画で、どの家にもたいてい車とスクーターがあった。

インドの都市部に住むミドル・クラスの家庭では、住みこみや通いのお手伝いさんが家事を請け負っていることが多い。私が借家に入った翌朝、この家にも早速、隣近所の何軒かで働いている通いのお手伝いさんとコックさんがやってきた。それまでも長年にわたってこの家の掃除、洗濯、炊事を請け負ってきたと力説され、それではとりあえずひと月とお願いしたところ、結局そのまま半年間にわたって彼女たちのお世話になることになった。とりわけ、コックさんとその娘さんは、仕事時間以外にも気軽にやってきては、食料品の買い方からグジャラーティー語の会話練習、いたずら電話の撃退法にいたるまで、あれこれと面倒をみてくれた。

コックさんは皆から「ダニベン」と呼ばれていた。「ベン」はグジャラーティー語で姉妹の意味で、この地方では女性の名前につける尊称としても用いられている（綴りのうえでは bahen なのだが、会話のなかでは「ベン」と聞こえる）。彼女は当時 50 歳で、我が家から歩いて 10 分の距離にある小さなアパートに、仕立て屋の夫、長男夫婦とその子供、次男、長女のナイナーさんとその子供 2 人、という 9 人家族のなかで暮らしていた。台所と風呂場のほかには 6 畳程度の部屋がひとつあるだけだったが、台所の横にベランダがついており、何人かはそこで寝ているようだった。

ダニベンによれば、彼女の母親は 12 歳のときに結婚したという。ダニベン自身は 10 学年、つまり 16 歳ごろまで学校に通ったのちに結婚した。まもなくコックとして働きはじめ、一時期は大学の寮食堂でも働いている。自分自身の勉強に対する心残りもあったのか、娘のナイナーさんにはきちんとした教育を受けさせようと、地元のカレッジに送りこんだ。ナイナーさんはそこでヒンディー語を専攻して学位を取得し、卒業後は家庭教師をしたり近くの小学校で教えたりするようになった。

ナイナーさんは若くして結婚し、娘と息子が一人ずついたが、配偶者との関係がうまくいかず、子どもたちとともに実家に戻って生活していた。離婚手続きに関する諸問題や、世間の風当たり、狭い家のなかでの家族関係など、悩みは尽きないようだったが、彼女は実によく働いていた。自分自身が英語を話せずに就職で苦勞していたことから、子どもたちは英語で授業を行う私立学校に通わせたいと考え、学校や授業料についての情報を集めていた。コックであるダニベンは、仕事先のミドル・クラス上層の家庭を通じて、様々な職種の人々と接する機会があり、就職や子どもたちの教育に関しては、これがしばしば重要なコネや情報源となっているようだった。

近年、インドでは経済成長の成果が強調され、エリート層の一部では 21 世紀はインドの時代であるとまで主張されている。ダニベン一家の小さなアパートは、そうした「輝かしさ」からは一見かけ離れたところにある。しかし、そんな彼らの生活も、教育をひとつの手がかりとしながら、世代ごとに確実に変化しつつある。これからのインドを大きく変えていくのは、あるいはこれらの層の人々なのかもしれない。

* 東京大学大学院・総合文化研究科